

2018. 1. 31

No.205

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

年間送料込み1,000円

1部 100円



2018年1月

江別市美原からの
樺戸連山（ピンネ
シリと隈根尻山）

光に向かって前へ進もう

歩いて、見て、聞いて、書いた30年



寒中お見舞い申し上げます。みなさまはお元気で新年を迎えたでしょうか？

昨年、一番嬉しいニュースは高裁が伊方原発の運転差し止めを命じたことでした。火山の噴火で火砕流が伊方原発に達する可能性があるとしたのです。泊原発も廃炉になるのではと期待しています。

今年は、憲法改正をなんとしてもストップさせたいです。沖縄では、保育園や小学校に米軍ヘリから部品や窓が落ちたり、東村での炎上事故、うるま市伊計島、読谷村での不時着など米軍ヘリの事故が相次いでいます。数メートルずれていたら子どもの命が奪われる惨事になるところでした。まるでアメリカの占領下のようなのです。9条で戦争放棄をうたっているのに、オスプレイの訓練飛行は憲法違反ではないでしょうか？

先日は詩人のアーサー・ビナードさんがいらして、東村高江のヘリパッド新設に反対する抗議行動に何度も参加した話をされました。その場には沖縄県の現国頭村安波に住んでいた平良啓子さんの姿もあったと語りました。ビナードさんの編著「知らなかったぼくらの戦争」に登場します。（銀河通信202号に紹介）

平良さんは1934年生まれ。9歳の時に乗った疎開船「対馬丸」は米軍の魚雷を食らって-

撃沈し、約1500人が犠牲になりました。平良さんは泳いで筏にたどり着き一命をとりとめたのです。安波村から疎開した40人のうち生き残ったのは3人だけでした。その後すぐに沖縄戦も体験して、やんばるの山奥に逃げで命をつないだのです。

平良さんは戦後教師になり、多くの子どもたちを教えました。平良さんの「うっちゃられた船だ」「わたしたちはうっちゃられた」という言葉の向こうに、ビナードさんは「だれをもうっちゃらない基本姿勢が輝いている」と書きました。

その姿が目には浮かぶようで、私もこんな風に毅然と生きていと思いました。貴重な生き物が生息するやんばるの森も辺野古の海も失ってはならないと思います。

ノーベル平和賞の授賞式が昨年12月10日にあり、国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）が受賞しました。広島での被爆体験を語ったサーロー節子さんの講演が素晴らしく心に残りました。

サーローさんはカナダに在住していますが13歳の時に被爆しました。暗闇の中で「あきらめるな。がれきを押し続けろ。光が見えるだろう。そこに向かってはっていけ」という声を聞いて、倒れた建物の下から這い出して生き残りました。「核兵器の終わりの始まりにしようではありませんか。この光は、この一つの尊い世界が生き続けるための私たちの情熱であり、誓いなのです」と結びました。

生涯を通しての、核の悪と戦争のむごさを伝える生き方に勇気づけられました。「光に向かってはって行け」は夫の闘病とも重なり何度も心の中で呟いています。

「銀河通信」は7月に、30周年を迎えます。平和、反原発、環境、人権など市民運動をささやかですが伝えてきました。ここまで続けられたのは、一緒に頑張ってきた仲間が読者になってくださったからです。今年もご愛読をよろしく願います。

いのちの輝き 希望のあかり クッキングハウス30周年を祝う会



昨年12月22日、居場所づくりを続けているクッキングハウスの30周年を祝う会があり、私もお祝いの気持ちを伝えたくて調布に出かけました。会場は調布市文化会館たづくりくすのきホールです。

会場は各地から集まった支援

者500人で満杯。ソシオドラマの幕が開きました。クッキングハウスが始まった1980年代からの歩みを歌と語りでミュージカル風に演じられました。

(※ソシオドラマは集団の社会的不適応や人間関係を改善するためアメリカの精神病理学者が考案した即興の劇)

台本を書いたクッキングハウス代表の松浦幸子さんは、30年を振り返って「かつての精神科医療の閉鎖性から、私は患者さんたちの、たくさん不自由を見て、辛くなった。『閉鎖病棟でカギがかかっていて自由に外出できない。給食を食べるだけで自由に外出できない、電話がなくて自由にかけられない、新聞や本を自由に読めない』キリがないほどの不自由だらけでした。略 人間らしく、生きる自由を取り戻したい！病院ではなく町の中に当たり前で暮らせる場所をつくらうと、小さな居場所を開いたのでした。自由はただ待っていてもやっこない。自らが自覚し、学び、行動し、努力して、手に入れていくものなのだと思います。クッキングハウスの30年の歴史そのものが、自由になりたいと切望して歩き続けた道だったのです」と綴りました。

ソシオドラマを教えた医師の増野肇さんは「メンバーの人たちが、生活の中で感じていることを詩にして、日常生活の体験がにじみでてくるいい歌詞が出来上がりました。驚いたことにその詩に各自がメロディを付けて作曲もしたのです。略 この途方もない企画が月ごとにだんだん形ができていくのに立ち会いましたが、それは素晴らしい体験でした」とお祝いのメッセージを寄せました。

私も在職中、心病む患者さんと接する機会がありました。ほとんどの人が薬で管理され、地域で自分らしく生きる場はありませんで



した。その後、松浦さんの著書「不思議なレストランー心病む人たちとこの街で暮らしたい クッキングハウス物語」を読んで、その実践に共感。クッキングハウス会の賛同会員になって20年になります。

会場からどれほどたくさんの人たちが、クッキングハウスの活動を温かく見守り応援してきたのかが伝わってきました。

第一章「心の居場所」は私の大好きな歌「君は君の主人公だから」の合唱で始まりました。ナレーションあり、松浦さんの「心の病気をしても、病院ではなくて、街の中で、人間らしく、当たり前と一緒に暮らしていきたいのです。心豊かに生きていける社会をつくりたいのです」。そして出演者の一人、恵子さんが「ぜひ、心の居場所をつくってください。私、行きたいです。病気がよくなって、ごはんがつかれるようになったら、結婚したいんです」と正直な気持ちを歌と語りで表現しました。そうしたドラマが6章まで続きました。

2年がかりで一人ひとりの思いが歌にこめられ心に響きました。こんなまっすぐな思いを、私は聴いたことがありません。観客は泣いていました。私も涙が出て仕方がなかったです。クッキングハウスで心を開き、語り、



学び、自立していった人たち。「未来に向かって」の終章は『平和のうたをいつまでも』を全員で合唱。詩が素敵なので紹介します。

今日もまた 生きて

いることを 心の中で そっと喜ぶ みんな
で野菜を 刻んでゆく 指先に伝わる 青菜
のいのち
私たちはいつでも 微笑んでいたいから お
だやかな心を 乱さないで
この街で 暮らしていることを 笑顔の中で
そっと喜ぶ 料理を作ったり運んだり 身
体を感じる 人のぬくもり
私たちはいつでも 陽気でいたいから 平穏
な暮らしを 壊さないで
平和をもとめる 限りない思い おだやかな
毎日が その証なんだから 平和のうたを
この居場所から 平和のうたを いつまでも

クッキングハウスは希望のあかりです。こんな居場所が全国に広がってほしい。ささやかな応援しかできませんが、もし札幌でも心病む人の居場所ができれば、精一杯応援したいです。

レストラン「クッキング
ハウス」の店内

※松浦幸子編集
責任「いのちの
輝き 希望のあ
かり」ソシオド
ラマが本になり
ました。問い合
わせはクッキン



グハウス会Tel & Fax 042-498-5177へ。このページのイラストは松浦素子さん（了解を得て使用しました）

付度を笑う 自由を奏でる 東京新春トークコンサート



植村隆さんを支援する2018新春トークコンサートが1月6日午後、東京・世田谷区の成城ホールで開かれました。約4

00人の観客が、松元ヒロさんのソロライブと崔善愛さんのピアノ独奏を楽しみました。植村隆さんは、「2018年の私の決意は①植村裁判勝利②河野談話の継承③ヘイトスピーチのない社会づくりに尽力」と語り、支援を訴えました。

当日売りを一時ストップするほどの盛況で、松元さん、崔さんの人気と植村さん支援の広がりあらためて実感させる会となりました。

最初は松元ヒロさん。政治を鋭く笑い飛ばし痛快。

マルセ太郎さんの「記憶は弱者にあり」の言葉を紹介。「元慰安婦の人たちに何度でも謝らなければならない



い。被害者がもういいよと言ってくれるまで」と安倍政権の冷たさを批判しました。さらに昨年、米軍への思いやり予算の疑問に挑んだドキュメンタリー映画「ザ・思いやり」のリラン・バクレー監督と一緒にアメリカを訪問した時のエピソードを紹介。最後に大評判になった自著「憲法くん」の一説を語り、憲法前文を朗々と暗唱しました。

私は初めて聴きましたが、ヒロさんが尊敬するマルセ太郎さんの生前を彷彿させました。当時、マルセさんは、「スクリーンのない映画」で「生きる」を一人語りで演じ、圧巻でした。



その頃、がんの痛みと闘いながら、ユーモアも交えながら渾身の語りをした日を鮮やかに思い出しました。ヒロさんの風

刺コント、多くの人に聴いてもらいたいです。

ピアニストで植村裁判を支える市民の会の共同代表でもある崔善愛さんはバラード第一番などショパンの4作品を独奏しました。その合間に「電車の吊り広告で文春の見出しで植村さんのことを知った。私は21歳の時に指紋押捺を

拒否して右翼から攻撃されました。朝日新聞の小尻知博記者（植村さんと朝日新聞入社同期）は指紋押捺問題を朝日新聞トップで報道し、1987年銃で撃たれました。私は記事で応援してもらったのです。だから植村裁判支援に関わっています」と語りました。



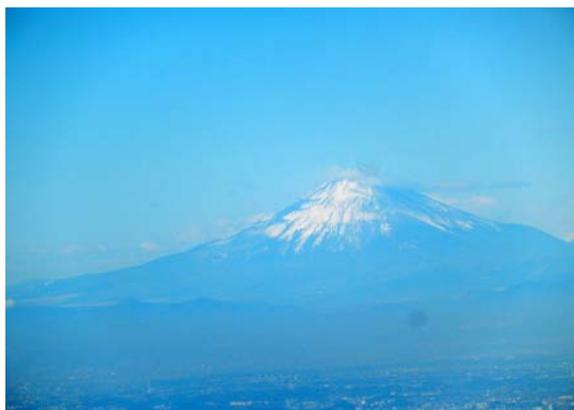
最後に植村隆さんは1991年の朝日新聞大阪本社版の慰安婦記事や、関連記事を紹介し、「捏造記者」だという攻撃は不当ないがかりだと指摘しました。そのうえで、裁判勝利など3つの決意を述べ会場から大きな拍手が送られました。



植村裁判は今年最大のヤマ場を迎えます。トークコンサートの後の交流会には70人もの方が参加され、それぞれの方から裁判へ寄せる思いが語られ、東京支援チームの意気込みに私たちも勇気づけられました。

写真は植村訴訟東京支援チーム提供

昨年12月22日と今年の1月6日、東京を往復しました。一時は無理と思いましたが地域で心の居場所を30年も続けてきた人たちの集いにも、植村隆さんの支援コンサートにも参加することができました。東京上空から富士山が美しく、思わずシャッターを押した1枚です。家族の健康が心配ですが、多くの人の思いが実る年になって欲しいと願っています。



2018.1.6 東京上空からの富士山

ホロコースト否定に 立ち向かった人たち

『否定と肯定』

樋口 みな子



ホロコースト否定論者との闘いの実話を映画化した『否定と肯定』は、アメリカの大学で教鞭をとるユダヤ系女性歴史学者デボラ・E・リップシュタットが、「ホロコーストはなかった」と主張するイギリス人歴史家デイヴィッド・アーヴィングから、1996年に起こされた実際の裁判を中心に描いた作品です。原タイトルは「Denial（否定）」です。ホロコーストの「否定」と、もう一つリップシュタットの「自己否定」でもあることが明らかにされていきます。映画はホロコーストの歴史認識を問う法廷劇です。

元慰安婦の記事を「捏造」と攻撃され、激しいバッシングにさらされ家族も脅迫された植村隆さん（韓国カトリック大学客員教授）が名誉棄損で裁判を起こして、反論を繰り広げています。映画は植村さんの裁判と相通じ、必見です。

立証責任はアメリカでは原告側にありますがイギリスでは被告側にあるということです。つまり、ホロコーストはあったということを法的に証明しなくてはならないのです。

ジュリアスやランプトンらの弁護団は、裁判に勝つために標的をアーヴィングだけに絞ります。アウシュヴィッツに出向き調査もします。ナチスはホロコーストやユダヤ人虐殺の事実を隠蔽するため、施設を徹底的に破壊し、あらゆる証拠を隠滅していました。それでも虐殺の痕跡はないか？とさまざまな角度から調べ、アーヴィングの膨大な日記や著書を丹念に読み込みます。その調査力が圧巻！

しかしリップシュタット本人と、ホロコースト生存者を裁判では証言させないと決めるのです。納得がいかないリップシュタットは激しく反発します。

原告はアーヴィング、リップシュタットは被告という対決の構図ではなく、むしろ、イギリス流の訴訟に勝利するためアーヴィングの論理の矛盾を突こうとする弁護団とアウシュヴィッツ生存者の証言を入れたいと望むリップシュタットの葛藤が描かれます。彼女は悔しさに眠れない日々を過ごします。

2000年1月。王立裁判所で裁判が始まりました。毒ガスでの殺害はなかったと主張するアーヴィングにランプトンは「すぐに焼却する死体をガス消毒する理由は何か？」と問い詰めます。アーヴィングは「思いつきで書いたかもしれない」とうろたえます。初めてリップシュタットは、ランプトンが調査に基づいて厳しく追及していることに気が付き、自分が証言台に立たないことを受け入れるのです。今までの不信感が氷解しチームワークが築かれていく過程が丁寧に描かれます。-4-

ランプトンが弁護団の方針でリップシュタットに「自己否定」を強いたことを謝る温かい人間性も描かれ、深みがありました。自分の良心を人には委ねない生き方をしてきたリップシュタットが、人生で初めて良心をランプトンに委ねると伝える場面が印象に残りました。

ランプトンは、アーヴィングの著書において1977年の初版ではホロコーストの存在を認めているのに1991年には否定していることについて、



「嘘を知りながらなぜ受け入れたのか」と責めます。アーヴィングの嘘が次々に暴露され、意図的に

史料を捏造したことが立証されていきます。嘘を一つ一つ検証して胸のすく思いがしました。もう勝利は目前か？と見守る中、裁判長が「反ユダヤ主義を信念とする発言ならそれを嘘だと非難できないのではないか」と質問をします。これまでの努力が無になるのかと弁護団の当惑する姿も描きます。

これは表現の自由に関する難問であり、フェイク表現の自由は許されるのか？という問いでもあると思います。私は偽りを述べる自由があるとは思いません。偽りの発言で個人が社会的に葬られることは許されないと 생각합니다。

ホロコースト否定論に抗する裁判でありながら、原告と弁護団の、真実を追求する熱意と信頼が全編を貫き、清々しい気持ちで見終えました。

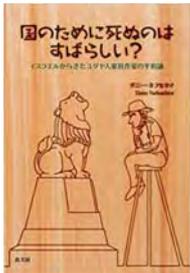
リップシュタットを演じたのはレイチェル・ワイズです。『ナイロビの蜂』（2005年）ではアカデミー助演女優賞を受賞。この映画でも、信念にあふれた女性を演じて心に残りました。

私は2014年にアウシュヴィッツを訪ねこの場で130万人以上のユダヤ人らが殺されたことを、残された大量の髪の毛や、靴、トランクや日用品などから想像することができました。アウシュヴィッツ博物館には、ガス室に投げ込まれた大量のチクロンBが保存されていました。何故ホロコーストはなかったと言えるのかと、アーヴィングに怒りがこみあげました。

声高に言いつのれば、あたかもそれが事実であるかのように広まります。世界中にあふれるフェイクニュース。事実を追求する目を養わなければ、嘘がまるで真実であるかのように大手をふるって一人歩きを始めてしまいます。改めて、日本もドイツのように徹底した歴史教育が必要だと思いました。

（シネアスト 札幌映画サークル会報
2018年2月号掲載）

Books



国のために死ぬのは
すばらしい?
イスラエルからきたユダヤ人
家具作家の平和論

ダニー・ネフセタイ著
高文研 1620円

ダニー・ネフセタイさんは、日本に住んで38年になります。昨年12月に札幌で講演し、イスラエルでの兵役の体験を語りました。その当時は国を守るために軍隊は必要だと信じていました。近隣諸国の子どもたちが、安心して眠ることができなくなる事を想像出来なかったと語り、思考停止してはならない、「戦争に反対」と一人ひとりが意思表示していくことの大切さを訴えました。

なぜイスラエルは戦争という手段を捨てられないのか。なぜ日本は脱原発を選択できないのかを本書で語ります。

イスラエルでは小学生のときから、建国の英雄トルンペルドールの「国のために死ぬのはすばらしい」という言葉を刷り込まれ、「相手を嫌っているのはイスラエル側ではなくアラブ側である」と教えられてきました。だが、2008年末にイスラエルがガザ攻撃で無防備な子どもを含む多くのパレスチナ人を殺害したとき、ダニーさんは目が覚めました。戦争でなく外交に頼るべきだといっていたリベラル派まで、この攻撃を肯定したのです。それまでは、イスラエルは平和を望んでいると思っていましたが、戦争を防ぐチャンスはあっても防ごうとしなかったのだと気づきます。日本で出会ったかほるさんと結婚し、以来日本で暮らしている、家具作家ダニーさんは、「世の中を良くすることも、物づくりをする人間の使命である」という信条をもっています。

本書では、戦乱の絶えない祖国イスラエルを批判。「3.11」後の日本で脱原発の道を進むことを願い、行動してきた日々を綴ります。ダニーさんは、祖国のメディアと同じように日本のメディアも都合の悪い情報を隠そうとすることに気がつきました。それは軍需産業と原発産業だ。共通点は、少しの人の利益のために大勢の人が犠牲になることだと批判しています。

戦争の正当化と差別を生む教育を受けたイスラエルの高校生がアウシュヴィッツを見学に行くと戦争の酷たらしさや人間の尊厳の喪失を学ぶより「国防意識」をさらに高めて帰国するという。そう思わない人もいるとしてもショックでした。あれほどの人権侵害と人間としての尊厳を奪われても、教育によって、人の心までが変わるのかと思いました。私たちは半年先の世界がどうなっているのか思い描けない時代に生きています。ダニーさんは無関心であってはならない。黙ってはならないと訴えています。私は行動する勇気を本書から受け取りました。お勧めです。



人生で大切なことは月光荘
おじさんから学んだ

月光荘著 産業編集センター
1512円

銀座にある画材店「月光荘」

が100年を迎えて一冊の本になりました。月光荘のおじさんと呼ばれるのは、橋本兵蔵さん。富山から上京して与謝野晶子さんと知り合い、出会った芸術家たちに励まされ、月光荘を開いた人です。

名前で呼ばれるより「月光荘おじさん」と呼ばれ親しまれてきました。フランス製の絵の具を扱っていたので中川一政、小磯良平、猪熊弦一郎などに最頂にされ、コバルトブルーの製法を発見。純国産第一号の絵具を誕生させました。その後、コバルト・バイオレット・ピンク（月光荘ピンク）を発明したのです。お店で売られる画材や文房具はすべてオリジナルです。

おじさんはどんな時も、固定観念にとらわれず、自分の頭で考え行動してきました。本のタイトルと同名の章に、当時15歳だった水野スウさんの文章があります。スウさんは心揺れる少女の頃、おじちゃんに丸ごとのそのままを認めてもらったときの嬉しさや、カタログの月光新聞のお手伝いをして、一人前として認めてもらえた喜びを綴っています。

おじさんは信念の人です。「人間というものには平凡に暮らすのがいいのだ。いつも自然に、そして人の迷惑にならずに、人を喜ばすことをひとつだけできたらそれが最高の生き方だ。肩書きも勲章もいらぬ。自分にできることを精一杯やるのが人生だ」という言葉の通り生きた人生でした。

月光荘は娘、孫へと引き継がれましたが、月光荘おじさんの魂はいつまでも生きています。私もいつか東京に行ったら訪ねてみたいと思いました。

闘う文豪とナチス・ドイツ

トーマス・マンの亡命日記

池内 紀著 中公新書 886円

ノーベル文学賞作家のトーマス・

マン。ファシズム台頭で運命は暗転。体制に批判的なマンを、ナチスは国外追放にしました。以降、アメリカをおもな拠点に、講演やラジオ放送を通じて、ヒトラー打倒を訴え続け、その亡命生活は二十年近くに及びます。本書は遺された日記から浮かび上がる闘いの軌跡です。

ヒトラーによるワーグナー偶像化を痛烈に批判。著名人が雪崩を打つようにして新しい権力に迎合していったことも日記に記しました。著者が膨大なマンの日記を読み、どんな時代背景の下で書かれたのかが理解できるようにまとめられています。



独裁者に
ペンで
立ち向かった男

「個人はいかに無力で、良心について考えるのがいかに難しいことであるか。ある体制を容認しむしろ有利にはかるのは『第一級の犯罪行為』だということに、それを認めるとどのような言葉も聞こえてこないのである」という文章があります。日本も今同じ道を歩んでいるのではないかと鋭い警告の書です。



世界の旅人 堀さんのエスペラント気ままエッセー7

堀 泰雄著 ホリゾン出版
1296円

エスペラント語は世界共通語として知られていますが、この本を読んで世界中の人たちと交流できることを知りました。

著者の堀泰雄さんは、素晴らしい行動力で、歩いて取材して文章にしました。この著書は7冊目のエッセーというのも驚きです。今回のエッセーは3部構成で、東日本大震災被災地訪問記に10篇、エスペラントおたく堀さんの世界情報に、7編、「究極の戦争遺跡 戦死者のお墓めぐり」が納められています。

被災地宮古市田老については「防潮堤を信頼しすぎて、津波を見に行き行って巻き込まれた人が多くいたこと、防潮堤は壊れなかったため、乗り越えてきた津波は戻り道がなく、平野部にあった地域を総なめにしてしまったこと。人口4434人のうち200人近い死者や行方不明者を出した」とあり、被害の大きさに言葉を失いました。津波被災者支援で「唐丹(とうに)希望基金」ができていくつも奇跡が起きて、アメリカやカナダにまで広がった話なども興味深かったです。エスペラントもきっかけになったというのも、平和を愛する人たちの集まりだからでしょう。

エスペラント語を通して、世界中を旅する堀さん。私も行ったことのあるヒマラヤのアンナプルナとマチャプチャレが懐かしかったです。写真も多数あり、読みやすい。本の問い合わせはTel/Fax 027-253-2524 堀泰雄さんへ。

状況が一変するのです。フランクの母で、メアリーの祖母にあたるイブリンが登場。亡きメアリーの母は天才数学者で、イブリンはその才能を受け継ぐ孫娘に英才教育を施そうとしてフランクと対立します。フランクは姉からの遺言「せめて子どもは普通に育ててほしい」という願いを守っているのです。フランク役のクリス・エバンスがありのままのメアリーを受け止め、喧嘩もしながら、質素な生活を楽しむ自然な演技が光っていました。特別扱いをしない隣人ロバータを演じたのは、オクタヴィア・スペンサー。「ドリーム」でもアカデミー賞にノミネートされた名女優です。家族はいろんな形があっていい。メアリーが教えてくれました。



永遠のジャンゴ

エチエンヌ・コマール監督

多くのミュージシャンに大きな影響を

与えたロマ(ジブシー)出身のギタリスト、ジャンゴ・ラインハルトはナチスに抗して演奏活動を続けました。本作はジャンゴの栄光と苦悩・葛藤を丁寧に描きます。

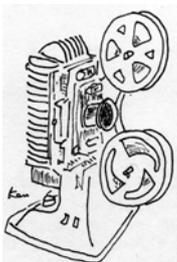
最初のシーンは、パリでもっとも華やかなミュージックホール。第二次世界大戦の暗い時代に、満員の聴衆を沸かせます。臨場感たっぷり、その場で聴いているかの錯覚に陥りました。一曲終わるごとに拍手したくなります。その一方で、ナチスによるロマへの迫害は悪化し、多くの仲間たちが虐殺されジャンゴとその家族にも危険が迫っていました。そんなある日、非情な現実打ちのめされていたジャンゴに、ナチス官僚が集う晩餐会での演奏が命じられるのです。しかも「ブルースはダメ」「ベースは弓で弾け」「シンコペーションは5%まで」などと細かな条件をつけるのでした。ジャンゴはナチスの要求を無視。ダイナミックで哀愁のある楽曲で魅了します。

ジャンゴはドイツの難民キャンプで、ロマへの迫害を目の当たりにして、ナチスへの怒りを募らせます。家族と行動を共にすれば、危険も倍加するため、スイスへの脱出はたった一人で決行します。レジスタンスの協力もあったのだと思います。スイスで家族と再会できたときはホッとしました。

命がけで逃げたジャンゴの音楽に深みが増したことはいうまでもないでしょう。

音源も譜面も一部分しか残っていないジャンゴが作曲した「レクイエム」が初めてオルガンで再現され感動しました。

立川直樹さん(プロデューサー)は「ジャズという枠も時代も超えて愛され、尊敬されているジャンゴの知られざる物語が、その音楽のように時には軽やかにまた哀しみと深みを帯びた感覚で描かれた見応えのある映画」と評しています。



gifted/ギフテッド

マーク・ウェブ監督

ギフテッドとは生まれながらの特別な才能



の持ち主のこと。生意気盛りの7歳の少女と

独身の叔父、そして片目の猫。一風変わった家族の穏やかな暮らしは、少女の天才的な才能が知られるにつれて波風が立っていきます。

メアリーとフランクと猫が夕暮れ時のビーチでたわむれるシーンが美しい。メアリーが天真らんまん、教師やフランクとのやりとり思わず笑ってしまいます。

しかし、学校でメアリーの才能が知れ渡ると

妹の葬儀のために半世紀ぶりにスウェーデン北部に帰郷するエレ。車中での息子との会話から、先住民族サーミ出身で



あることが分かります。

故郷を捨てたエレの回想が始まるのです。

1930年代、スウェーデン北部の山間部に居住するサーミは支配勢力のスウェーデン人によって劣等民族として差別を受けていました。サーミ語を禁じられた、寄宿学校に通う少女エレの成長が描かれます。成績も良く進学を望んだエレは、教師からは「あなたたちの脳は文明に適應できない」と告げられるのです。妹にサーミの伝統の歌を聴かせるシーンがあります。アイヌ音楽ととても似ていました。妹に「この歌を歌ってはならない。サーミ語も使わないで」と伝えるのです。村の少年らから「臭い」と言われ続けた彼女が、自分の体臭を気にして、髪のおいを嗅いだり、何度も体を洗うシーンが痛ましい。ある時、スウェーデン人のふりをして忍び込んだ夏祭り、エレは都会的な少年ニクラスと出会い恋に落ちるので

す。トナカイを飼育し、テント暮らしの生活から抜け出したいと思っていたエレは、ニクラスを頼って街に出る決意をします。列車の中で服を盗み、自分の着ていた民族服を焼き捨て、手に入れた服に着替えて都会の少女に生まれ変わるので

す。エレは都会の暮らしに自分の未来を描こうとするのですが、それを得たとき、サーミの伝統や文化や誇りを捨てるのです。ここで差別する者とされるものの対立を描いているのではありません。映像はルーツを失う少女の運命を静かに見届けるのです。

都会で生きたエレの後半の人生が見たかったです。サーミ人である姉妹がこの映画に出演したのもリアリティがありました。

サーミ人であるレーネ＝セシリア・スバルロクの演技が瑞々しい。自分の道を切り拓いていくたくましさにハラハラしながらも応援したくなりました。

2016年の東京国際映画祭で審査員特別賞および最優秀女優賞を受賞しました。昨年の暮れに観たのですが私の中では2017年度のベストテンの映画でした。



ユダヤ人を救った動物園 アントニーナが愛した命

ニキ・カーロ監督

第二次世界大戦中のポーランド・ワルシャワで、動物園のヤンとアントニーナ夫婦が300人ものユダヤ人の命を救った実話です。

夫婦によるこの活動がドイツ兵に見つかった場合、自分たちだけでなくわが子の命も狙われるという危険な状況にありながら、夫婦はひるむことなく困難に立ち向かっていきます。人も動物も分け隔てなく愛するアントニーナをジェシカ・チャステインが熱演。ユダヤ人強制居住区域に忍び込み彼らを次々と救出。ユダヤ人たちを動物園の檻に忍びこませるといって驚くべき策を実行します。空襲によって動物園の檻が破壊され、パニックに陥った動物たちが脱走する姿が描かれています。シマウマやラクダ、ゾウ、トラ、ライオンなどが登場しており、アントニーナがゾウに銃を向ける兵隊たちに「彼を撃たないで！」と必死に叫ぶシーンがあります。戦争の恐ろしさ、悲惨さを動物の命を通して伝えました。すべての動物には専門の飼育員や獣医たちが一日中付き添ったそうです。

戦時下において女性がどれだけ勇気のある行いをしたのか、どういう経験をしたのかということ。戦争というのは、女性にも、子どもにも、それから動物にも被害をもたらした。女性目線の映画になっていたのが新鮮でした。ニキ・カーロ監督は「スタンドアップ」でも女性差別を裁判で訴える映画を作っています。

「銀河通信」に素敵なメッセージをいただきました。クッキングハウスの松浦幸子さんの文章を掲載し、私自身励みにしたいと思います。8ページに続きます。

動くクッキングハウス スペシャル

「銀河通信」200号のお祝いに



右が松浦幸子さん

北海道江別市の樋口みな子さんが発行してきた個人通信「銀河通信」が200号になった。1988年創刊。家族の近況や沖縄への旅で強く心を揺り動かされたこと、自然保護、環境問題、市民活動など、手書きの通信

でスタートした。樋口さん自身が関わってきた活動は、とても幅広く、読む度に知らなかったことを教えてもらうことができ、理解が深まり、視野も広がってくる。すごい読書家でもあり、映画も大好きな樋口さん。毎号の本の紹介と、映画の感動も新鮮だ。

私もクッキングハウスを始めた頃から10年間ほどは手書きの通信を発行していた。印刷機もなく、自転車で紙を積んで、生活クラブ生協国領センターや、社会福祉協議会で印刷させてもらっていた。それでも、小さな居場所の活動のあふれる思いを伝えたくて、「クッキングハウスからこんにちは」を発行し続けて、30年目の2017年6月5日で

証人尋問詳細決まりました

札幌訴訟 口頭弁論にたくさんの傍聴をお願いします。

2月16日(金)
喜多義憲氏(元北海道新聞ソウル特派員)
13:30-15:30

3月23日(金)
植村隆氏、櫻井よしこ氏
10:30-17:00

両日とも、傍聴整理券の発行は抽選となり、混雑が予想されます。札幌地裁に早めの来場をお願いします。
詳細は以下の案内をご覧ください。

174号になる。だから、29年間で200号とは、本当にすごいこと。銀河通信は、機関紙コンクールの個人通信の優秀賞に輝くほどに、自分の活動を広い視野に立ち、表現している。

2017年4月15日、札幌・北光教会での銀河通信200号記念のお祝い会に出席。スピーチで、どんなに励まされ、新たな勇気をもたらしてきたかを伝えた。いつも「クッキングハウス」のみんなと歌っている「君は君の主人公だから」を歌うと、樋口さんは、ふあっと心に響いたのか、涙をこぼしながら聴いてくれた。私も嬉しかった。

ピアニストの崔善愛さんのショパンのノクターン・子犬のワルツ・別れのワルツ。アイヌ文化を伝承するアイヌのうた(銀の滴 降る降るまわりに 金の滴 降る降る まわりに)。安積遊歩さんは、「あきらめないで、声を上げ続けていきましょう」と力強いお祝いの言葉。アイヌの文化を伝える知里幸恵記念館づくりに一緒に関わった方、山岳会の仲間たち、「自然を守る会」の環境保護活動の仲間、ハンセン病を考える会、泊原発廃炉をめざす会、植村隆さんの従軍慰安婦問題の裁判闘争の仲間、憲法9条の会。スピーチをなさる方々の話から、いかに幅広い市民活動をやってこられたか、またいかにたくさんの活動を紹介してきたか、あまりにも奥が深く、驚いた。

やっと会えた樋口みな子さんは小柄で、穏やかな表情の人。こんなにたくさんのエネルギーが詰まっているなんて、想像できないほど、つつまじやかな女性でした。人と人との豊かなつながりを築いてきた樋口さんの友達の輪の一人であることが嬉しかった。会いに行って良かった。

「クッキングハウスからこんにちは」と「銀河通信」どちらも1000部ほど発行の通信。それでも、読んで元気になったり、希望を見つけてくれる人がいる限り、これからも新鮮な発見と地道な活動を表現し続けていきたい。

(クッキングハウス会代表・松浦幸子)

「クッキングハウスからこんにちは」
2017年6月5日発行174号掲載

※「銀河通信」の読者はWebと紙媒体で600人です。

購読料と寄付ををありがとうございます
(敬称略) 2017.12.14~2018.1.29

植村裁判 札幌訴訟 元朝日新聞記者の精神科医がジャーナリスト・櫻井よしこ氏と新聞社とを訴えた名誉毀損訴訟

最大のヤマ場を迎えました。多数の傍聴をお願いします!

<p>2月16日(金) 第10回口頭弁論 証人尋問 喜多義憲氏 北海道新聞 ソウル特派員</p> <p>札幌地裁805号法廷 午後1時30分開廷 ●集合 午後0時45分 ●抽選 午後1時</p>	<p>3月23日(金) 第11回口頭弁論 本人尋問 原告 植村 隆氏 vs 被告 櫻井よしこ氏</p> <p>午前10時30分開廷 ●集合 午前9時45分 ●抽選 午前10時</p>
---	--

両日とも、傍聴整理券の発行は抽選となり、混雑が予想されます。早めの来場をお願いします。

元NHKディレクター、「私たちの戦争と平和資料館」館長
池田恵理子さん講演会

「慰安婦」問題はなぜ、タブーにされたのか

講演会日時：2月18日(金) 午後6時30分～7時30分
会場：札幌エルプラザ 4階大研修室



by sumio higuchi: オリオン座流星群 (日高町富川)

堀泰雄/檜山菜津子/有田美江/さかい廣/新妻徹/藤島美佐子/志田郁夫/大関裕美子/宮原光恵/小野寺恭子/太田肇・朋子/長澤恵子/柴崎徹/杉本富明/菅原三栄子/室田トモ子/野村保子/飯部紀昭/遠藤浪子/小澤登美栄/水野孝昭/高橋雋/佐々木純一/岩井善昭/小林嘉則/堀元進/高橋春枝/近藤啓子/村田和子/谷井利明/伊藤泰弘/阿部一子/神成令子/
合計124,500円は約3回分の印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございます。
何人かの方から、Webで読むので、送らなくていいというメールを頂きました。印刷通信を希望しない方はお知らせください。Webで読める環境があり通信費の振込みがない方は今回から送りません。無料のフリーペーパーも多いですが、1000円の通信費がなければ発行は厳しいことをご理解ください。郵送なしで印刷通信は1部100円としました。